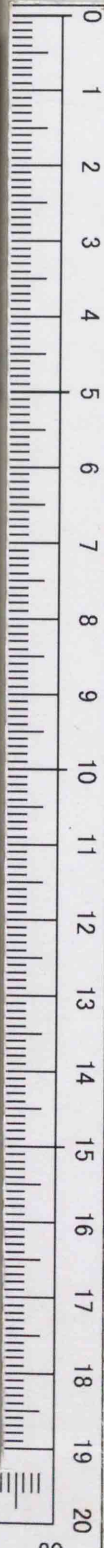


中國文教科書 修正十版 卷九

3759
Y019
資料室



41806

教科書文庫

4
810
41-1915
20000 42084

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

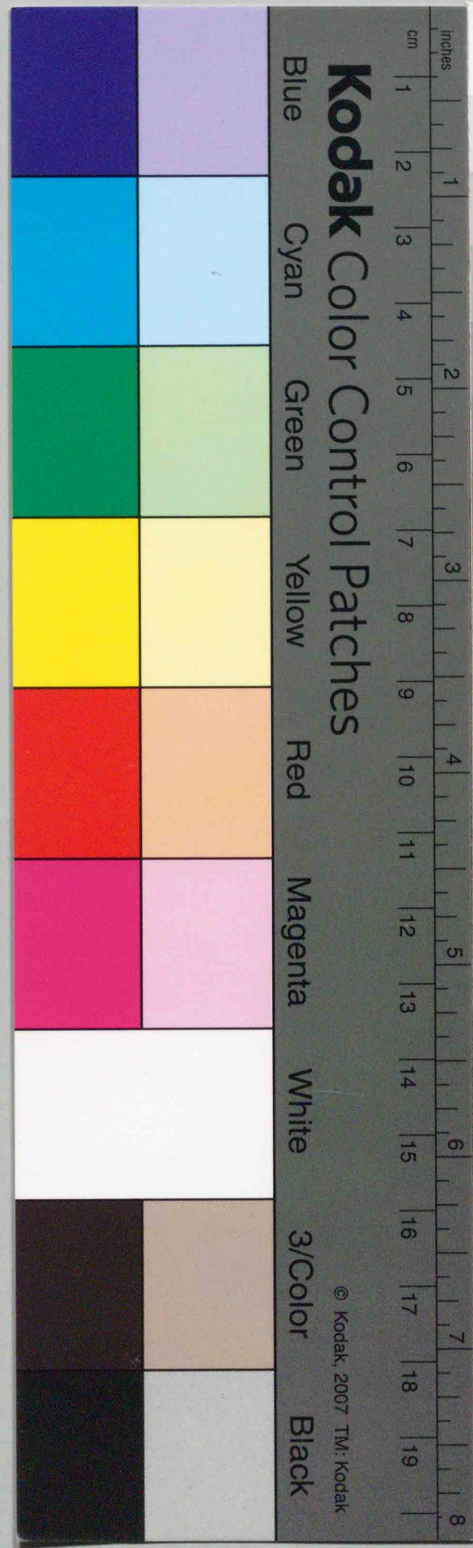


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

375.9
Y019

修正第十版
文部省檢定
中學國語教科書
大正四年一月九日

寄
力
四
二
九

吉田彌平編

卷九

中國
國文
教科
書

東京
光風館藏版

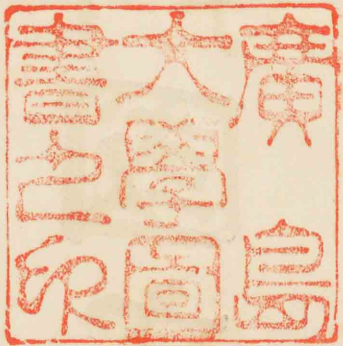
私立
育英
甲種
電
話
本
局
一
二
七
九
番

中國文教科書 卷九

目次

一	王陽明	末廣鐵腸	一頁
二	待賢門の戦その一		七
三	待賢門の戦その二		五
四	孔子研究の後に書す	桑木嚴翼	三
五	俚諺論	大西祝	元
六	新島守		三
七	頼山陽その一	朝比奈知泉	五
八	頼山陽その二	朝比奈知泉	五

目次



九 落花の雪……………三

一〇 平安朝時代の文學その一

 第一 和歌……………七〇

 第二 日記……………七六

一一 不二の神山……………七九

一二 羽衣(謠曲)……………九

一三 平安朝時代の文學その二

 第三 物語……………一〇三

 第四 草子……………一〇七

 第五 歴史……………一一

一四 朗詠五則……………二七

一五 寺門政次郎に答ふ(書牘文)……………藤田東湖 二九

一六 國體の精華……………穂積八束 一九

中國文教科書卷九目次終



中國文教科書卷九

一 王陽明

末廣鐵腸

末廣鐵腸
名は重恭
政治家。
(二五八―二五九)

王陽明
名は守仁
明人。
(二二二―二二九)

古往今來、或は學問を以てし、或は道德を以てし、或は功名事業を以てし、其の師表とすべきもの一にして足らず。而して余の特に王陽明先生を仰ぐ所以は、即ち性理學上に一活眼を開き、學問・道德・事業を打して一丸とし、内外一致、精粗間なき妙あればなり。支那に於て性理學を中興せしものは實に程朱の二家

とす。彼等は物に就いて理を究むるを以て工夫とす。然れども時位處の異なる、何ぞ豫め一定の道理あるを得んや。且世界の事は機に應じ、變に従ふ活手段なかるべからず。二家は聖人の道といふ一の標本を立て、天下を率ゐて之に従はしめんとし、遂に學問と功業との間に杓鑿を生じ、儒者は性理を高談して事業を卑しめ、功業に志すものは儒學を以て經世に關係なきものとなすに至れり。

陽明の出づるや、儒學を研究して傍ら老莊釋氏に及び、以て安心立命の地を求めんとして、未だ得る所あ

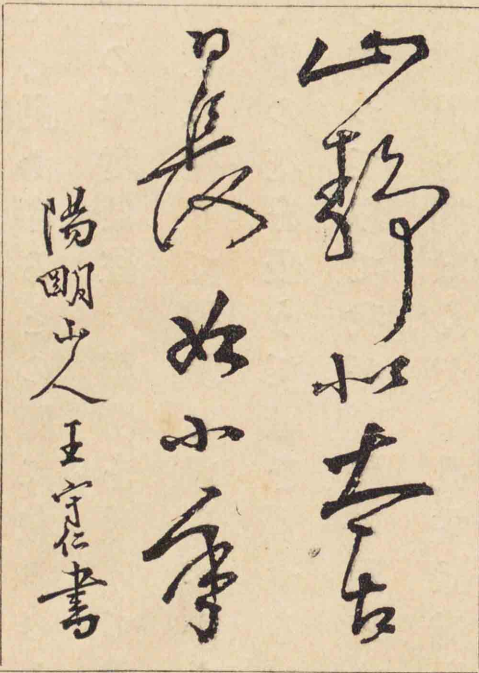
らざりき。其の龍場驛に謫せらるゝや、蛇虺瘴癘の間、に在つて、仇敵の其の後を窺ふあり、自ら思へらく、「得失榮辱皆よく超脱す。唯生死の一念尙未だ化せざるを覺ゆ。」と。乃ち石槨を爲り、自ら誓うて曰く、「吾たゞ命を俟つのみ。」と。已にして思ふ、聖人は是に處する更に何の道かあるを。忽ち中夜大いに格物致知の旨を悟り、是より我が靈明の本心を以て萬事に酬酢し、而して文書・錢穀・兵馬・刑政、一として我が本心を鍊磨する地にあらざる無きを知る。

其の地方官となつて兵馬を司るや、漳寇を始とし、横

寧王の亂
明の武宗の正
徳十四年(一七
九)寧王宸濠反
す。

水桶岡・三泐・大帽・泐頭等の諸寇を平げ、恩威並び行はれ、人民其の徳に懐く。寧王の亂を起すや、天下震動し、明の社稷將に危からんとす。陽明詭計を以て寧王を誘ひ、一戦してこれを擒にせり。陽明の事に處し、兵を用ふるや、神出鬼没、端倪すべからず。其の然る所以のものは皆良知鍊磨の工夫より來れり。其の三泐を征するや、書を州人に寄せて曰く、「破山中賊易、破心中賊難」と。其の寧王と交戦するに當り、軍中に坐して講學する、平生の如し。謀者走つて前軍の利を失ふを報ず。座中皆怖るゝ色あり。陽明出

でて謀者を見、退いて座に就き、また前言を續ぎ、神色自若たり。須臾にして賊兵大いに潰ゆるを報ず。



王陽明筆蹟

座中皆喜ぶ色あり。陽明出てて謀者に接し、座に就きて神色復初の如し。彼、平生の大功皆此の明

鏡止水の心より來る。或人問ふ、「兵を用ふる術ありや。」曰く、「學問純篤、此の心を養ひ得て動かざる、乃ち

術のみ。凡そ人智の相去る、甚だ遠からず。勝敗の決は陣に臨んで後卜するを待たず。只此の心の動くと動かざるとの間に在るのみ。」と。

世の學者は往々陽明を斥けて佛とせり。夫、學問は時世に従うて進歩せざるべからず。學を成すは須く蜂の花を吸うて蜜を製するが如くなるべし。自ら取つて以て我が實學の用となすべくんば、何ぞ内外異同を問はんや。孔孟は處世の道を論じて、其の性理を説くや未だ精微ならず、釋氏は解脱の妙あるも世間と離るゝ弊なき能はず、而して、世の英雄豪傑

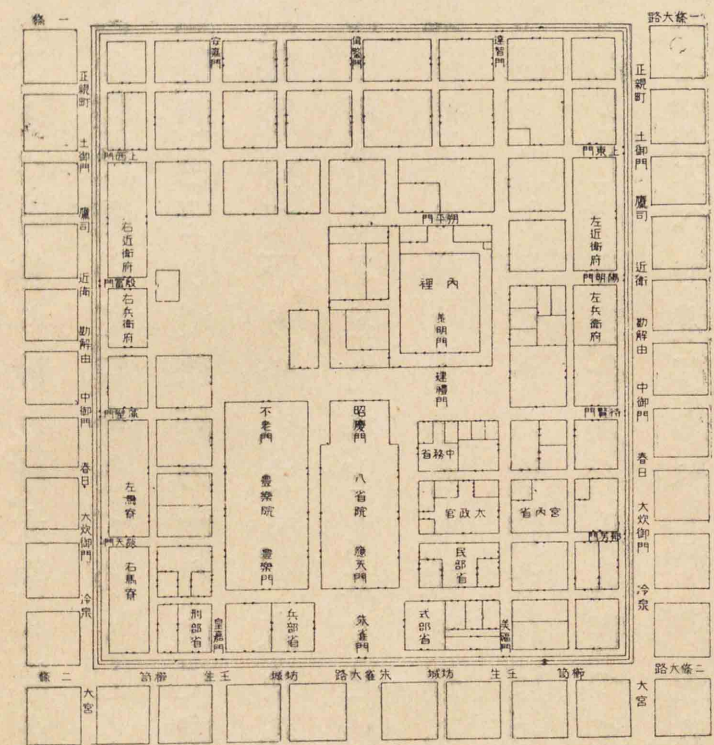
も學問の大本領なければ、萬變に酬酢して誤なき能はず。陽明は高く心鏡を掲げて宇宙の萬象を照し、道德事業、一以て之を貫き、後世の爲に實學の基礎を開く。孔孟を以て釋迦を兼ね。實に豪傑の事業を成せるものといふべきなり。余の陽明を仰止するは、則ち之が爲のみ。 (古人評論)

二 待賢門の戦その一

左衛門佐重盛は生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に櫛句の鎧、蝶の裾金物打つたるに、

龍頭の兜の緒を締めて、小鳥といふ太刀を帶き、切斑の矢負ひ、重籐の弓持つて、ウツギ黄鶉毛なる馬に、柳櫻摺つたる貝鞍置かせて乗り給へり。重盛のたまひけるは、年號は平治なり、花浴は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げんこと何の疑かあるべき。誰か爰に樊噲張良が勇をなさざらん。とて三千餘騎を三手に分つて、近衛・中御門・大炊御門・大宮表へ打出で、陽明待賢・郁芳門へ押寄せたり。大内には南・西・北三方の門をさし固め、東表をば開かれたり。承明・建禮の脇の小門をも共に開きて、大庭

には馬ども多く引立てたり。梅壺・桐壺・紫宸殿の前



後まで兵ひしとなみ居たり。皆源氏勢なれば、白旗二十餘流打立つたり。大宮表には平家の赤旗三十餘流差しあげて勇み進める三千餘騎、一度に

鬨をどつと作りければ、大内も響き渡つて夥し。鬨の聲に驚いて、只今までゆゝしく見えられつる信賴卿、顔色變りて草葉の如くにて南階を下られけるが、膝戦いて下りかねたり。人をみくゝに馬に乗らんと引寄せさせたれども、太りせめたる大の男の大鎧は着たり、馬は大きなり、乗り煩ふ上、主の心には似も似ず、逸り切つたる逸物なれば、つと出でん、つと出でんとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば、天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒もかくやと覺ゆるばかりにて、乗りかねたまふ所を、侍

二人つと寄つて、疾く召し候へ」とて押上げたり。餘りに押したりけん、弓手の方へ乗つこして、伏様にどろと落つ。急ぎ引き起して見れば、顔に沙ひしと附き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日頃は大将とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、あの信賴といふ不覺人は臆したりな」とて日華門を打出でて、郁芳門へ向はれければ、信賴も鼻血押拭ひ、とかくして馬に搔乗せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用にあふべしとも見えざりけり。左衛門佐重盛五百餘騎をば大宮表に残し置き、五百

餘騎にて押寄せて呼ばはり給ひけるは、「この門の大將軍は信賴卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔太宰大貳清盛が嫡子左衛門佐重盛、生年二十三。」と名のり懸け、れば、信賴返事にも及ばず、それ防げ、侍ども。」とて引退く。大將の引き給ふ間防ぐ侍一人もなし、われ先にと逃げければ、重盛愈、勇みて大庭の棕の木の許まで攻め附けたり。義朝これを見て、「惡源太はなきか。信賴といふ大臆病人が待賢門をはや破られつるぞや。あの敵追出せ。」と宣ひければ、「承り候。」とて驅けられけり。續く兵には鎌田兵衛

大藏
武藏國比企郡
にあり。

後藤兵衛佐々木源三・波多野次郎三浦荒次郎須藤刑部長井齋藤別當岡部六彌太猪俣小平六熊谷次郎平山武者所金子十郎足立右馬允上總介八郎關次郎片桐小八郎大夫以上十七騎轡を雙べて馳せ向ふ。大音聲を揚げて、「この手の大將は誰人ぞ。名のれ聞かん。かく申すは清和天皇九代の後胤左馬頭義朝が嫡子鎌倉惡源太義平と申す者なり。生年十五歳、武藏の大藏の軍の大將として叔父帶刀先生義賢を伐ちしより此の方度々の合戦に一度も不覺の名を取らず。年積つて十九歳。見參せん。」とて五百餘騎

の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、豎様横様十文字に敵をさつと蹴ちらして、端武者どもに目な懸けそ、大將軍を組んで撃て。櫓の匂の鎧に蝶の裾金物打つて黄鶉毛の馬に乗つたるこそ重盛よ。押雙べて組んで落ち、手捕りにせよ。」と下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍ども與三左衛門・新藤左衛門を始として百騎ばかりが中にぞ隔りける。悪源太を始として十七騎の兵ども大將軍に目を懸けて大庭の棕の木の中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追廻して、組まん組ま

んとぞ揉うだりける。十七騎に駆け立てられて五百餘騎叶はじとや思ひけん、大宮表へさつと引く。

三 待賢門の戦その二

大將左衛門佐は弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふ所に、筑後守つと参りて、曩祖平將軍の二たび生れ替り給へる君かな。」と向ふ様に譽め奉れば、今一度驅けて家貞に見せんとや思はれけん、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して又大庭の棕の木まで攻め寄せたり。又悪源太驅け向ひ見回していひ

筑後守
平家貞
平將軍
平貞盛

けるは、「只今向ひたるは皆新手の兵なり。但し大將は元の大將重盛ぞ。以前こそ洩らすとも今度に於ては餘すまじ。押雙べて組んで捕れ、兵ども」と下知すれば、勇みたる十七騎われ先にと進みければ、今度は難波次郎同じき三郎瀬尾太郎伊藤武者所を始として百餘騎が中に隔てたるに事ともせず、悪源太弓をば小脇に搔いはさみ、鎧踏張り突立ちあがり、左右の手を挙げ、幸に義平源氏の嫡々なり、御邊も平家の嫡々なり。敵には誰か嫌はん、寄れや、組まん」といふ儘に先のごとく大庭の椋の木の下を追廻して五六

度までこそ揉うだりけれ。重盛組みぬべりもなくや思はれけん又大宮表へ引いて出づ。悪源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、汝が不覺に防げばこそ敵度々駈け入るらめ。あれ速に追出せ」といひ遣はされければ、俊綱馳せてこの由をいふに、「承り候。進めや、ものども」とて色も替らぬ十七騎、大宮表に駈け出でて敵五百餘騎が中へ面も振らず割つて入る。引立てたる勢なれば馬の足を立てかねて、大宮を下りに二條を東へ引きければ、我

が子ながらも義平はよく駈けたるかな、あ駈けたりとぞ譽められける。

大將重盛・與三左衛門景安・新藤左衛門家泰主從三騎懸け放れ、二條を東へ引かれければ、惡源太鎌田にきつと目合せて、爰に落つるは大將とこそ見れ。返せやとて追つかけたり。既に堀川にて追つつめけるが、弓手の方に材木多く充ち満ちたるに、惡源太の乗り給へる馬かたなづけの駒にて材木にや驚きけん、馬手の方へけし飛んで小膝を折つてどろと伏す。鎌田兵衛延ばさじと十三束取つて交ひ、よつ引いて

ひようと射る。重盛の射向の袖にはたと中りて飛び返る。やがて二の矢を射たりければ、押附にちよりと中りて、篋かつぎ碎けて跳り返れり。惡源太、これば聞ゆる唐皮といふ鎧ごさんなれ。馬を射て落ちん所を撃てと下知せられければ、又よつ引いて追ひ様に筈の隠るゝ程射込みたり。馬は屏風を返す如く倒るれば、材木の上に跳ね落され、兜も落ちて大童になり給ふ。鎌田堀川を馳せ越えて重盛に組みんと落ち合ふ。重盛近づけては叶はじとや思はれけん、弓の弭にて鎌田が兜の鉢をちようと突く。突

かれてゆらゆる間に兜を取つて打着つゝ緒を強くこそ締められけれ。

與三左衛門馳せ寄つて中に隔り申しけるは、漢の紀信は高祖の命に代りて滎陽の圍を出し、終に天下を保たせき。主辱しめらるゝ時は臣死すといふに非ずや。景安爰に在り、寄れや、組まん」といふ儘に鎌田兵衛と引組んで取つて押へける處に、惡源太馬引起し、これも堀川を馳せ越えて重盛に組まんと跳んで懸りけるが、鎌田をや助くる、大將をや撃たん」と思案しけれども、大將には又も寄せ合ふべし。政家を撃

たせては叶はじ」と思ひ、與三左衛門に落ち合ひて三刀刺して首を取る。重盛は頼み切つたる景安撃たせて、命生きて何かせん」とて既に惡源太と組まんとせられけるを、進藤左衛門馳せ來り、家泰が候はざらん處にてこそ大將の御命をば捨て給ふべけれ」とて我が馬を引き向け、中に隔てゝ惡源太とむずと組む。政家は重盛に組まんとしけるが、主を撃たせては叶はじと思ひければ、進藤左衛門に落ち重つて首を搔く。この間に重盛は虎口を遁れて六波羅まで落ちられける。二人の侍なからましかば助かり難き

命なり。(平治物語)

桑木嚴翼

文學博士。

東京帝國大學

文科大學教

授。

(二五三—二五四)

四 孔子研究の後に書す

桑木嚴翼

霖雨纔に霽れて杜鵑血に啼く時、故人逝いて復歸ら
ず、遺著一卷空しく我が手に存す。嗚呼、此の書は是
蟹江君が將に大いに爲すあらんとする首途となし
しものに非ずや。今や反つて君が絶筆として、徒に
君が謹嚴の風采を偲ばしむるものたらんとす。旻
天何の故に此の努力の一生を中斷し、此の篤行の學
者をして思ふ所を盡さしめざるぞ。我等はたカン

蟹江君

名は義丸。

文學博士。

東京高等師範

學校教授。

(二五三—二五四)

カント
獨逸の哲學
者。

(1724—1804)

トと共に現世の活動が形を變へ、様を改めて長へに
繼續することを信ぜんか。然も故人の業績の、終に
復現世に顯るゝに由なきを奈何せんや。
題して孔子研究と云ふ、其の名何ぞ奇なる。思ふに、
研究は疑惑と相隣す。大聖歿して此に三千載、道統
綿々として絶えず、學者争つて其の眞意に背かざら
んことを努む。今に及びて之を研究すとは何の謂
ぞ。即ち或は語を爲して曰く、「孔子は尊奉すべし、研
究すべからず」と。然れども、有史以來既に數千年、人
生れ、人死すること、必ずや數萬歳を下らじ。孔子の

偉を以てすとも、なほ以て此の人生の大にして測り難きに及ぶべしとする能はず。然も此の悠久なる人生なほ永劫に學徒の研究に委すべしとせば、孔子研究豈以て聖人を汚瀆するものとすべけんや。研究果して尊奉の念を損するか。此の書と其の著者とは明かに其の然らざるを表示せり。翻つて思ふ、孔子研究、其の事何ぞ凡なる。或は曰く、「孔子の言敢て深刻なるに非ず、其の説又幽玄の理を含めりと稱すべからず」と。然も、猶、經傳の註疏を尋ぬれば、漢唐より近代に至りて五車に滿つ。又泰西

様に依りて
堪笑翰林陶
學士、年々依
様畫「葫蘆」

ヘーゲル
獨逸の哲學
者。
(1770-1831)

の所謂史的研究に類するものを求むれば、諸家の著既に洽く世に行はる。此の書はた何を以て新に地步を占めんとするぞ。曰く、註愈、精にして愈、本義に遠ざかるは古學者の弊なり、論愈、巧にして愈、原意を脱するは新學者の病なり。此の如くして様に依りて葫蘆を描くもの相重りて所謂大倉の粟陳々相因るを致す。孔子の事、豈漫に明かなりと云ふべけんや。古に拘せず、新に泥まず、自ら眞の研究の途を開かんとする者、是、此の書の抱負に非ずや。若し夫、ヘーゲルと共に孔子を以て深刻幽玄ならずと斷ずる

者、或は此の書に依りて其の見の至らざるを悟るを得んか。

然れども、此の書の教訓は更に大なるものあり。蓋し蟹江君は蒲柳の質、時に病なき能はざるべきも、其の養生の法を守れるや至れり、盡せり、必ずしも天壽を全らし難かりしに非ざるなり。然も世に在ること久しきを得ざりしもの、遂に其の生平、學事に心身を盡瘁せるが爲に歸せざるべからず。而して、東洋倫理の研究は君が畢生の心血を濺げる所にして、孔子研究の一書は實に君が身命を捧げて成れるもの

なるを思へば、君の志を以て一死敵壘に肉薄する將士に比するに、其の間毫も軒輊すべき所以を見ざるなり。且夫、初、君が此の書の稿を畢ふるや、既に學界耆宿の定評あるに關せず、君は猶幾多の改竄を施さんことを期し、暫く之を筐底に藏せり。其の出版の期に後れたる、實に君が病床急に改刪の業に従ふを得ざるべきを覺りて後、始めて本稿を印刷に託せるに因る。此の如くして君が枕頭の慰藉として翹望せしものは、徒に人をして惆悵の念に禁へざらしむるに至れり。然らば則ち此の書の期に後るゝはよ

く君が慎重苟もせざるを示すものにして、此の書を讀む者は冥々の裏、自ら君が篤學の氣風に感化せられざるを得ざるべし。もし此の書に就いて、單に其の文を會し理に通ずるに止らず、進んで君が套語たる不退轉の精神に想ひ到らんか、誰か感奮して君の遺業を紹介がんことを欲せざらんや。乃ち知る、君の書此に至大の教訓を垂れ、君の業此に不朽の意義を有すべきを。

遮莫、君が意に満たずして遂に出版に決せる際の心事を察し、更に君が病床、指を屈して裝釘の成る日を待てる時を冥想すれば、我等遂に多くを言ふ能はざるなり。況や他人の序跋を掲ぐるは君が常に厭ふ所、今は乃ち歿後幾もあらずして、君の志に背き、拙惡の文字を以て君が業を汚すの已むを得ざるに至れるをや。嗚呼、我等何の不幸ぞ、此の書を遺稿として世に傳へざるべからざらんとは。(孔子研究)

五 俚諺論

大西 祝

一國民の言ひ慣れたる俚諺の内容を深く研究すれば、其の國民の歴史・氣質・風俗・人情・學術・宗教・社會制度

大西祝
文學博士。
京都帝國大學
文科大學教
授。
(二五四—二五九)

等、其の一切の生活と其の生活の理想とに就いて發見する所多々あるべし。「花は櫻木、人は武士」といふ美しき諺は言ふも更なり、武士は食はねど高楊枝、武士は相見互」といふ如きは、我が國の歴史に大光彩を放てる武士といふ階級の理想を窺ふに足るべく、又之によりて、かゝる理想を愛重したりし全國民の氣風を察し得べし。「泣く子と地頭には勝たれぬ」といふを見れば、千萬言の歴史的敘述に劣らず、我が國の歴史の或時代に於ける地頭といふ者の勢力の如何なりしかを察知し得べく、「女に家なし」、貞女は兩夫に見

えず」といふなどは我が國に固有なる諺とはいふべからざれども、亦以て婦女子に關する我が社會制度の一面を窺ふに足るべく、嫁が姑になる、「老いては子に従へ」といへば、我が國の家族制度を示す所あり。「さはらぬ神に崇まし」、棄てる神あれば助ける神あり。「神は正直の頭にやどる」、苦しい時の神だのみ」などは、宗教思想を示すべく、「袖ふり合ふも他生の縁」といへば、以て佛教によりて注入せられたる因果思想を見るに足るべし。

歐洲諸國の諺には夫婦の關係をいへるもの甚だ多

く、我が國にては寧ろ親子の關係をいへるもの多きが如し。「親の心、子知らず」子を知るもの親にしくはなし。「子ゆゑの闇に迷ふ」孝行をしたい時分に親はなし。「可愛い子には旅をさせよ」子は三界の首枷「子が思ふよりは、親は百倍も思ふ」といふなど、親の慈をいふや至れり盡せり。その上に「子よりも孫は可愛い」といへる、何の言かこれにまさりて孫の愛の濃かなることゝを發表するものぞ。かく親の慈愛を稱ふるものから、俚諺はまた能く人情の他面をいふ。「子を棄つる藪はあれど身を棄つる藪なし」とはよくも吾人の主我心を言ひ穿てるものと謂ふべし。

一般の人情に自利の念ほど強きはなかるべし。俚諺の如何に多くが損得の念を主とせるものなるかを見よ。而して其の中に如何によく普通の人情を穿てるものあるかを見よ。「下さるものは夏も御小袖」「かたきの家にては口をぬらせ」「ころんでも唯は起きぬ」「泣く子も目を見る」まことに然り、泣く子すら自身を護るには油斷せざるなり。「油斷大敵」「小を棄てて大に就け」「長いものには巻かれよ」「曲らねば世に立たれず」など、いづれか利益の念を主とせざる。聖人

は「知らざるを知らずとせよ」といひ、俚諺は「知つて知らざれ」といふ。「鷹は死ねども穂をつまず」など氣概を稱揚するもあれど、俚諺の大體の教訓は「かしこかれ、損をすな」といふにあり。

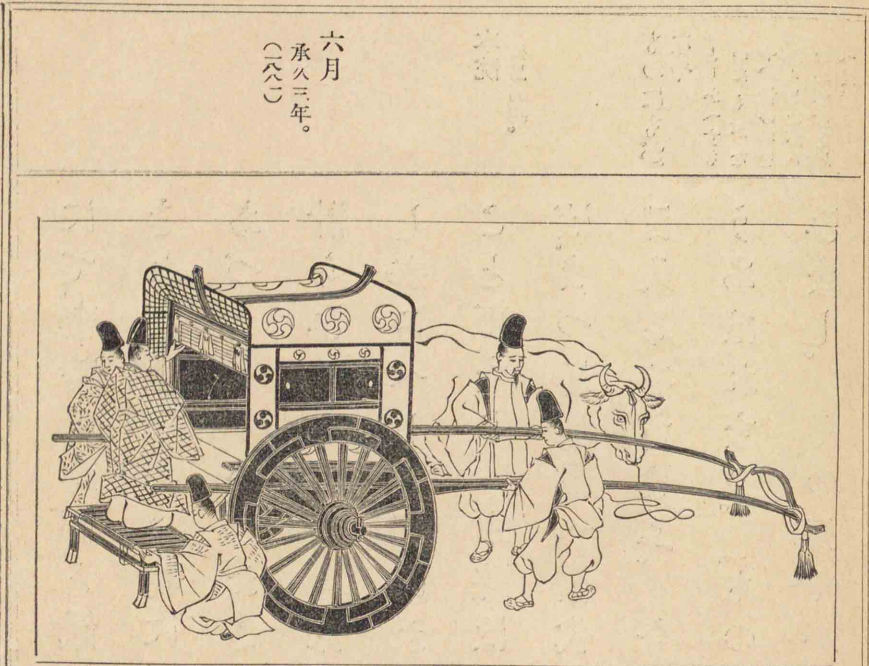
俚諺は事の一面を見てこれを誇張して言ふ傾あるものから、其の他面をいふに躊躇せざるが故に、一見其の判断の相反するが如く思はるゝものあれど、かく両面よりいふところよく世態人情の實相にかなひて、其の判断概ね公平なり。「すきこそ物の上手なれ」といへど「下手の横ずき」といふを忘れず、「親に似ぬ

は鬼子」といへば「形生めども心は生まず」といふ。かく事の両面を叩いて世相の内秘、人情の裏面を穿たんと力むる、これ即ち俚諺が警戒と諷刺とに富める所以にして、中には一言よく人情の裏面を託きて巧に罵倒し了するものあり。

我が國の俚諺は、他國の俚諺に比して其の性質及び價值如何。これらの問題を考ふる前にはまづ我が國の俚諺を採集せざるべからず。予輩は早く適當なる準備を具へたる人が此の事に手を着けんことを切望せざるを得ず。(天西博士全集)

六 新島守

いつの年よりも五月雨はれまなく、富士川天龍など
 えもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬も打渡し難
 ければ、攻めのぼる武者ども、あやしく艱めり。か
 かれども、遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者
 も出で立つ、其の勢六萬餘騎とかや。宇治瀬田へ分
 ち遣はす。世の中ひゞきの、しるさま、言の葉も及
 ばず、まねびがたし。あるは深き山へ逃げ籠り、遠き
 世界に落ち下り、すべて安げなく騒ぎみちたり。い



六月
承久三年
(一八七)

(考圖車輿) 車代

かゝあらんと、君も御心亂
 れておぼし惑ふ。豫ては
 猛く見えし人々も、實の際
 になりぬれば、いと心あわ
 たしく、色を失ひたる様
 ども頼しげなし。
 六月二十日餘りにや、いく
 ばくの戦だになくて、遂に
 味方の軍敗れぬ。荒磯に、
 高潮などのさしくるやう

にて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあ
きれて、上下たゞ物にぞ當り惑ふ。

あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍
計らひおきてつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷
し奉るべしと聞ゆれば、女院宮々處々におぼし惑ふ
こと更なり。本院は隱岐の國におはしますべけれ
ば、まづ鳥羽殿へ綱代車のあやしげなるにて、七月六
日入らせたまふ。今日を限りの御ありき、あさまし
うあはれなり。「ものにもがなや」とおぼさるゝもか
ひなし。その日、やがて御ぐしおろす。御年四十に

本院
後鳥羽院。

ものにもが
なや
とりかへすも
のにもがな
や、世の中を
ありしながら
のわが身と思
へば。

信實

右京權大夫藤
原信實。
(八七一―九五)

新院

順徳天皇。

帝
仲恭天皇。

一つ二つや餘らせたまふらん。まだいとほしかる
べき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせら
る。七條院へ奉らせたまはんとなり。かくて同じ
十三日に御船に奉りて、遙なる波路を凌ぎおほしま
す御心ち、この世の同じ御身ともおぼされず。いみ
じう、いかなりける世々の報にかとうらめし。新院
も佐渡の國に遷らせたまふ。まことや七月九日、帝
をもおろし奉りき。この卯月かとよ、御讓位とてめ
でたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にておりた
まへるためしも、これや始なるらん。さて上達部殿

中院
土御門上皇。

若宮
邦仁親王後に
後嵯峨天皇、
通宗、
通子、
通(後嵯峨帝
生母)、
親(通方、
承明門院
在子、
土御門帝
生母)

上人、それより下、はた残りなく、この事に觸れにし類
は、重く、軽く、罪に當る様いみじげなり。
中院は初よりしろしめさぬ事なれば、東にも咎め申
さねど、父の院遙に遷らせたまひぬるに、のどかにて
都にあらん事いと恐あり」とおぼされて、御心もて、そ
の年閏十月十日、土佐の國の幡多といふ處に渡らせ
たまひぬ。去年の二月ばかりにや、若宮いできたま
へり。承明門院の御兄人に、通宗の宰相中將とて、若
くて失せたまひにし人のむすめの御腹なり。やが
てかの宰相の弟に通方といふ人の家に留め奉りた

まひて、近く侍ひける北面の下臈一人、召次などばか
りぞ御供仕うまつりける。いとあやしき御手輿に
て下らせたまふ。道すがら雪かきくらし、風吹き荒
れ、吹雪して、來しかた往く先も見えず、いと堪へがた
きに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かるに、
うね世にはらゝまとしておそ生れけぬ。

おとこり知らぬわがふみだりふ。

「せめて近き程に」と、東より奏したりければ、後には阿
波の國に遷らせたまひにき。

四つにて位に即きたまひて、十五年おはしましき。

四つにて
後鳥羽院。

下りたまひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下には同じ事なりしかば、すべて三十八年が程この國のあるじとして萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を従へたまへりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりもまされる御有様にて、遠きをあはれみ、近きを撫でたまふ御惠、雨の脚よりもしげければ、津の國のこやのひまなき政を聞しめすにも、難波の葦の亂れざらんことをおぼしき。葦 藐姑射の山の峰の松もやうく、枝をつらぬて千代に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を経ても、空ゆく月日の限

こや
津の國のこや
とも人のいふ
べきに、ひま
こそなけれ、
葦の八重葦。

知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありありてよしなきひとふしに、今はかく花の都をさへたち別れ、おのがちりぐにさすらへ、磯の苦屋に軒をならべておのづからことゝふものとしては、浦に釣する海士小舟、鹽やく煙の靡く方をもわが故郷のしるべかとはばかり眺めすごさせたまふ。御すまひどもはそれまでと月日を限りたらんだに、明日知らぬ世のうしろめたさにいと心細かるべし。まいて何時を果と廻り逢ふべき限だになく、雲の波、煙の波の幾重とも知らぬ境に世を盡したまふべき御様ども、

くちをしといふもおろかなり。

このおはします處は、人ばなれ里遠き島の中なり。
 海づらよりは少しひき入りて、山かげにかたそへて
 大きやかなるいはほのそばだてるをたよりにて、松
 の柱に葦葺ける廊など、けしきばかり、ことそぎたり。
 誠に「柴の庵のたゞしばし」とかりそめに見えたる御
 宿りなれど、さるかたになまめかしく、故づきてしな
 させたまへり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやう
 になん。はるくと見やらるゝ海の眺望、二千里の
 外ものこりなき心地する、今更めきたり。潮風のい

柴の庵
 いくくにもす
 まれずばたゞ
 すまてあら
 ん、柴のいほ
 りのしばしあ
 る世に。

とこあたたく吹き來るを聞しめして、

これこそは新島守よ、たきの海乃

ららね波風まゝろ志て吹茅。(増鏡)

七 頼山陽 その一 朝比奈知泉

徳川氏の季年は、それ猶歐洲第十七世紀の末葉の如
 きか。彼に在りては、文學再興して、古文辭その盛行
 の極に達したれども、近世國語の文辭は猶幼稚なる
 を免れず。我に在りては、戰國の餘習已に脱して、文
 教は靡然として海隅に遍く、漢土の儒學詞藝その秀

頼山陽
 名は襄。
 安藝の人。
 (四四一―四九二)
 朝比奈知泉
 評論家。
 (三五三―)

を鍾め、その華を競ひたれども、わが近世文學は纔に萌芽を發したるのみ。若しこの時に方り、一世の偉才を生じて以て我が文學を振ふものあらんか、その風動は全國に影響して、感化は到る處に行はれ、或は獎勵せられ、或は誘導せられ、或は挑發せられて、才俊の士は彬々として輩出し、以て文藝の圃に遊ぶべく、我が文學の黄金時代は必ず三四十年前に來りしならん。

つらく、各國文運の振興を考ふるに、その先を作すものは大抵詩人ならざるはなく、その衰を振ふもの亦詩人ならざるはなし。チコーサー・スペンサー・ミルトン・シエクスピアの英文學に於ける、コルネーユ・モリエール・ラシーヌの佛文學に於ける、ゲーテ・シルレル・レッシングの獨逸文學に於ける、ダンテ・ペトラルカの伊太利文學に於ける、皆然らざるはなし。乃ちわが文學を振へる張本も亦詩人に求めざるべからず。余は古體詩家に於て眞淵・景樹二翁を得、近體詩家に於て近松・竹田二叟を得たれども、出づるに或はその時を得ず、學或はその道に適せず、才或はその志に合はず、これを以てその勢力の及ぶところ限極

眞淵
賀茂氏。
(三五七—三四九)
景樹
香川氏。
(四〇〇—三五三)
近松
門左衛門。
(三三四—三三六)
竹田
出雲掾。
(三五二—三四六)

世宗
世宗
世宗
世宗
世宗
世宗
世宗
世宗
世宗
世宗

せられて、未だ文學の全般に向つてその積衰を振ふ
こと能はざりしを見る。余はかの諸家の外に於て、
その才學よく權度を得て恰當の時世に遭遇しなが
ら、稀世の偉才を抱いてその用處を誤りたるが爲に
日本文學の泰斗たる名譽を得そこなひ、徒に史家な
り、策家なり、文家なり、詩家なりといはれたるのみに
て、冠するに絶世絶代の文豪を以てせらるゝに至ら
ず、萬能達して一心足らずといふが如き嘲をも受く
るに至りたる一人物を發見し、未だ曾てその人とそ
の才とを痛惜せずんばあらず。余は今日、世人が猶

その人を崇拜するを見て聊か自ら慰むる所なきに
しもあらずといへども、退いてこれを再考すれば、更
に深く惜む所なかるべからず。その人を誰とかす
る。山陽賴氏はなり。

「詩は別才なり」といひ、「詩人は生る、成るにあらず」とい
ふは、東西一般の金言なり。今山陽の一生を考ふる
に、その性格といひ、その言行といひ、その著作といひ、
一として詩ならざるなし。その童歳に當り夙成を
以て老博士を驚かしたるは詩なり。その父母を懷
ふに厚く、その王室を懷ふに厚く、その忠臣義士を懷

老博士
柴野栗山。

ふに厚く、天下國家を懷ふに厚く、情の熱するところ常に理の冷かなるに勝ちたるは詩なり。その北馬南船、行李卸さざるところなく、春花秋月、遊屐遍からざるところなきは詩なり。その畛域を撤して諸生を待ち、禮貌を外にして王公に接するは詩なり。山陽の性格言行、誰かこれを詩にあらずといはん。試にその著作の史篇を視よ。政記の一書は固より



山 陽 頼

多とするに足らず。外史何の取る所ぞ。その議論は平凡のみ、その事實は謬誤のみ、その體裁は偏失のみ。然れどもその筆墨の靈妙活動、殆ど天馬空を行く趣あり。叙事或は精、或は疎、或は長、或は短。精にして長なる時は微として穿たざるなく、細として及ばざるなし。疎にして短なる時は、或は脈々の餘情を含み、或は嫋々の餘韻を存す。争戦を敘すれば讀者をして汗を握らしめ、別離を敘すれば讀者をして涙に咽ばしむ。而してその敘論の如き、俯仰



山陽 頼氏 家譜印

低回、感慨淋漓、誠に讀者をして一唱三歎せしむるものあり。是等の文字、是等の思想、果して如何なる天才より流出したるものぞ。その題目を擇ぶに源平以後の争戦記を採りたるが如き、その事實に於ては博引旁搜と明證確説とを主として、猶讀者を了悟せしむるを務めず、専らその文章の靈動して讀者をして感激せしめんとしたるが如き、特に王室と忠臣とを思ふ情の切なるより、正記を立つる標準一定ならずして、その體裁の前後の矛盾を來せるを顧みざりしが如き、半生の精力を費して編述したる二十二卷

の外史は、看來れば一篇無韻の敘事詩たるのみ。試にその論策、文章を視よ。民政といひ、市糴といひ、水利といひ、邊防といひ、迂疎空濶にして實用に施すべからざるもの比々として皆是なれども、その熱情の溢れたる、その文勢の壯なる、頗る少年の大聲放語するに似たるものあり。而して外史以前の文章に就きてその精華を求むるに、その寸鐵人を殺すの妙、多くは小品の文字にあり。その形體は即ち論策たり、文章たり、その本質は即ち想像のみ、詩詞のみ。去りてその詩を見よ。雄健なるものあり、典雅なる

ものあり、適麗なるものあり、輕妙なるものあり。而してその最長を見るは歌行にあり、樂府にあり、料を史傳にとりてこれを詩詞に寓したるものにある。山陽亦自ら以て得意とし、余不欲詠物。詠物不若詠史。史中有無數好題目。隨讀淺深皆可成真詩。舍之而曰雁字鶯梭無爲也。とはその平常の持論なりき。亦以てその才の日本の文學を振ふに足りしを見るべきなり。余嘗てその戯に作れる今様を讀み、その跌宕飄逸自ら不群の趣あるに服し、思へらく、この詩才に加ふるに彼の史傳の嗜好あり、もし馳驟縱横、奇

今様

花よりあくる
み吉野の春の
曙見渡さば、
もろこし人も
高麗人も大和
心になりぬべし。

李北地

名は夢陽
明の詩人。
嚴海珊
清の詩人。

想を天外に飛ばし、その事實に拘泥することなく演義述作する所あらしめば、その造詣何ぞ唯李北地嚴海珊にして止まんや。わが史傳は未だ多く題詠に入らず、潜心好案を求め、研精妙句を探り、その外史に灑ぎたる心血を傾倒してこれを詩賦に注がんか、儼然たる敘事詩を作りてわが文學世界を風靡せんこと難からざりしならん。惜しいかな、漢土の詩に僻して固有の天才を萎縮し、經濟の學に志を奪はれて専ら精力を詩に用ひざりしこと。

八 賴山陽 その二

朝比奈知泉

余が山陽の専ら詩人とならざりしを惜む理由頗る多し。今且くこれを挙げんか。詩は別才なり。而して詩才敏妙、その天稟に出づ。これ一なり。詩人は料を取るに自ら新機軸を求むべし。而して史傳を以て料とすることその卓識に發す。これ二なり。詩人は愛情の熱肺腸なかるべからず。而して尊王の誠と忠臣義士を思ふ情とは、面に盎れて背に浹しこれ三なり。

而して余が特に表彰せざるべからざる第四の理由

江木鰐水
名は鰐
安藝の人。
山陽の門人
(1780-1851)

あり。余曾て江木鰐水の作りたる山陽先生行狀を讀み、その「常曰謂我才子未悉我者也、謂我能刻苦者、眞

雲耶山耶吳耶越水天髣髴青一髮萬里泊舟天草洋煙橫

眠驚船底響空潮天字洋中夜響枕

篷窓日漸沒瞥見大魚波間跳太白當船明似月

太白一星光如月波百照兄毛魚跳

決嘗西南不見山

危礁亂立大濤百官道沿緣海又山

勢孤依生帆影滅天連水處是臺灣

賴山陽未定稿 (山陽先生眞蹟西遊詩)

知我矣』といふに至り、竊にその實を失へるにあらざ

古賀穀堂

名は燕。
佐賀藩の儒。
(二二六―四九六)

るかを訝りしが、後かの前兵兒謠竝に蒙古來の原稿を觀るに及び、その苦心經營一句も苟もせざりし實迹を審にし、且その古賀穀堂を訪ひ、始、その千言立ちどころに成る敏才に驚きしが、數月を隔てて再び訪ひたるとき、その文稿の依然として改刪する所なかりしを見て、茲に與し易きのみ念を起したりといふ逸事を聞き、その意匠慘愴、勉勵刻畫の勞を厭はざる忍耐あるを明認し、坐に景慕の情を催したり。蓋し創意の才は必ず刻畫の力と相待ちて後始めて絢爛の華彩を發すべし。余が山陽を惜む第四の理由

とするは、即ち斯の經營刻畫の魂氣のみ。

又山陽が當時の儒者の如くに經義に耽り章句訓詁の末を爭ふ風なかりしは、頗るその才の發達に便なりしなるべしと雖も、かの經濟實用を以て學問の唯一本旨なりと考ふるに至りては、山陽亦その常套を襲ふを免れず。つらく、山陽の才幹を窺ふに、政治吏務はその長ずる所にあらざりしが如し。則ち早く自ら計をなし、區々たる論策を作るを輟め、大いに詩に奮はふ、その成功何ぞ唯今日の名聲に止るのみならんや。人或は謂はん、山陽は外史を著して一世

を鼓舞し、大いに尊王の氣象を喚び起して、遂に維新中興の遠因をなせり。若し外史を作らざる一詩人にて止まんか、何ぞ斯の大功を奏するを得ん」と。嗚呼、これ詩を知らざるもの、言のみ。詩の人心を感發するは、その勢力遙に散文に過ぐ。外史果して能く維新中興の遠因をなせりといはゞ、外史中の事實を敷衍してこれを詩にせるもの、亦豈その遠因となる能はざらんや。且外史の如きは、その文章如何に靈妙なりとも、今日の史學よりこれを視れば、小説と實録との間に横たはる一種の不可思議物たり。史

の名目を以てしては、決して完璧なりといふ能はず、上乘なりといふ能はず。焉んぞ始めより純然たる詩篇たるの愈れるに若かんや。柴野博士は山陽童時の詩を見て大いに嘆賞し、實材たらしむべし、詞人たらしむべからず」とて山陽の父春水に勧めて史を學ばしめたりといへり。博士の見、亦時流を脱せずといへども、その史を學ばしめたるは大いに可なり。その遂に修史の業に志すに至らしめたるは余輩が山陽のために再四歎惜する所なり。(今世名家文鈔)

俊基
藤原俊基。
先年
正中元年。

九 落花の雪

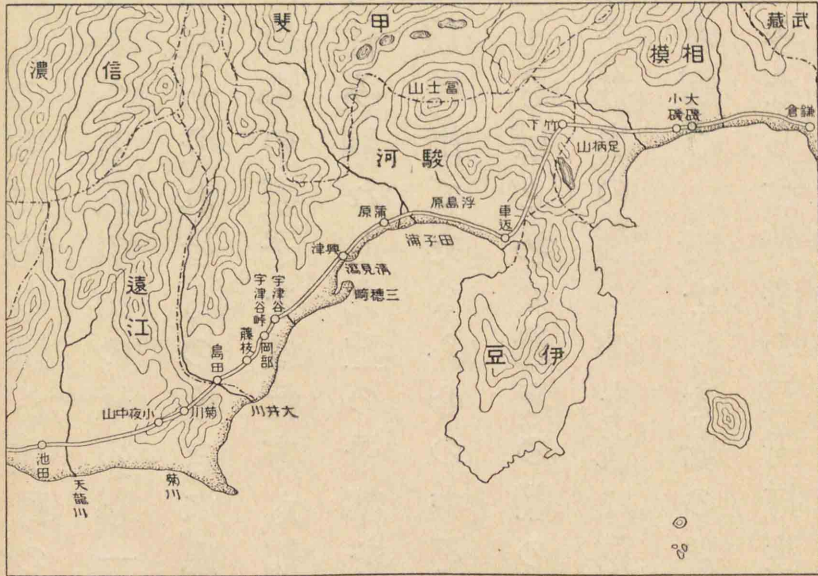
俊基朝臣は先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下りたまひしかども、様々に陳じ申されし趣、實にもと赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに専ら隱謀の企、彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に又六波羅へ召捕られて關東へ送られたまふ。再犯赦さざるは法令の定むるところなれば、何と陳ずとも許されじ、路次にて失はるか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひまうけてぞ出でられける。

七月十一日
元徳二年。
(一九〇)

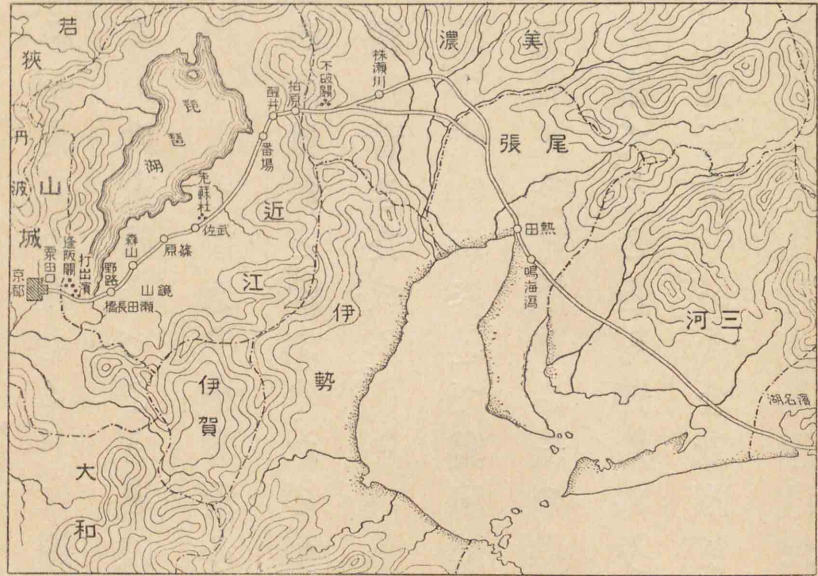
落花の雪
またや見ん交野のみのと櫻狩花の雪ちる春の曙。
紅葉の錦
朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦さぬ人ぞなき。

落花の雪に踏み迷ふ交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着てかへる嵐の山の秋の暮、一夜をあかすほどだにも旅寝となればものうきに、恩愛のちぎり淺からぬわが故郷の妻子をば行方も知らず思ひ置き、年久しくも住み馴れし九重の帝都をば今を限と顧みて、思はぬ旅に出でたまふ心の中ぞあはれなる。
憂きをばとめぬ逢坂の關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱。沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く。身をうき船の浮き沈み。駒もとゞると踏みならず勢多の長橋打渡り、行きかふ人にあふみ

うねの野
 近江より朝立
 ちくれば、う
 ねの野に鶴ぞ
 なくなる、明
 けぬ、この夜
 は。
 時雨も
 白露も時雨も
 いたくもる山
 は下葉のこら
 ず色づきにけ
 り。



ぢや、世のうねの野に
 鳴く鶴も子を思ふか
 とあはれなり。時雨
 もいたくもり山の木
 の下露に袖ぬれて、風
 に露散る篠原や篠分
 くる道を過ぎ行けば、
 鏡の山はありとても、
 涙に曇りて見えわか
 ず。物を思へば夜の



間にもおいそのもり
 の下草に、駒を留めて
 顧みる、故郷を雲や隔
 つらん。
 番場・醒ヶ井・柏原、不破
 の關屋は荒れ果て、
 猶もるものは秋の雨。
 いつかわがみのをは
 りなる熱田の八劍伏
 し拜み、汐干に今やな

なるみがた
小夜千鳥聲こ
そ近くなるみ
がた、かたむ
く月にしほや
満つらん。

るみがた。かたむく月に道見えて、明けぬ暮れぬと
行く道の末はいづこととほたふみ、濱名の橋の夕汐
に引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、
誰かあはれとゆふぐれの晩鐘なれば、今はとて池田
の宿に着きたまふ。

命なりけり
年たけてまた
こゆべしと思
ひきや、命な
りけり、さや
の中山。

旅館の燈幽かにして鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶え
て天龍川を打渡り、さやの中山越え行けば、白雲路を
埋み來て、そのとも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みて
も、昔西行法師が「命なりけり」と詠じつゝ、二度越えし
跡までも、羨ましくぞ思はれける。隙行く駒の足早

宗行郷
中御門中納言
宗行。

み、日已に亭午にのぼれば、餉進らする程とて輿を庭
前に昇き止む。轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿
の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり」と答へければ、承
久の合戦の時、院宣書きたりし咎に依りて、宗行卿關
東へ召し下されしが、此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水、汲下流而延齡、

今東海道菊川、宿西岸而終命。

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今はわが身の上にな
り、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠みて宿
の柱にぞ書かれける。

いにしへもゝる多めしを起く川乃
ねなじふがきに身をや志づゑん。

夢にも人に
駿河なるうつ
の山へのうつ
つにも夢にも
人に逢はぬな
りけり。

大井川を過ぎたまへば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鶴首げびすの船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも今は二度見ぬ夜の夢と思ひ續け給ふ。島田藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛裏枯れて物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、蔦かづらいと茂りて道もなし。昔業平の中將の住所を覓むとて、東の方に下るとて、「夢にも人に逢はぬなりけり」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

上なき思ひ
富士のねの煙
はなほぞ立ち
のぼる、上な
きものはおも
ひなりけり。

清見瀉を過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守にいと涙を催され、向はいづこみほが崎。興津蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見たまへば、雪の中より立つ煙、上なきおもひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、汐干や浅き、船浮きて、おりたつ田子のみづからも浮世を遶る車返。竹の下道行きなやむ足柄山の巔より大磯小磯見下して、袖にも波はこゆるぎのいそぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着きたまひけれ。(太平記)

一〇 平安時代の文學その一

第一 和歌

平安時代は支那の文化の次第に我が文化と融合したる時代にして我が特有の文化も亦次第に發展の氣運を見たる時代なりとす。謂はゆる和魂漢才の語は實にこの時代の造語なり。就中文學上に最大の關係を有するは假名文字の製作なり。奈良朝に於ては漢字を音韻文字として使用せしが、この時代に至り、或は之を草體にし、或はその扁旁を割きて假

名となし、音標文字として用ひたるより、漢文漢詩の製作は朝廷の科擧に必要な科目たりしに關らず、一面に於て國語を以て記せる純國文學の發生を促し來り、當時の建築彫刻繪畫等が日本式の發達をなしたると同じく、文學も亦特殊の發達をなして、支那の強大なる文化に壓伏せられざりし我が國民の元氣を發揮せり。

假名文字を以て一般に國語を寫すに至りしは清和文徳以後にあらんか。韻文としての和歌、散文としての物語は相前後して著しき發達をなし、平安朝の

文學界を燦爛たらしめたり。而して和歌の發達と之に對する賞翫とは、あらゆる文學の根柢をなせるが如し。

延喜の朝、紀貫之、凡河内躬恆等、敕を奉じて萬葉集以後の歌をえらぶ。古今集是なり。古今の歌を取りて萬葉のに比すれば、その内容を増加せること最も著し。是、佛教思想と六朝詩賦の思想とを短歌中に移植したればなり。造句の法も古今に至りては修辭上の進歩著く、譬喩縁語、かけ詞等最も巧緻に使用せらる。萬葉集は初心なる趣ありて簡古の味に富

紀貫之
(西三二六六)
大河内躬恆
(二五九一六四)

み、古今集は巧緻の境に進みて勁健の趣なし。自然と人生との融合はこの時代に至りて全く完成し、春花・秋葉・雪月の美、歌に詠すべき題目は多くこの時代に確定せられ、春の鶯、夏の杜鵑、秋の蟲の音、鹿の聲、四季の景物に伴ふ禽獸もまたおのづから一定し、春の花の盛には人生の樂しき朝をおもひ、萩の上の露には果敢なく消ゆる死の運命を悲しむ。和歌の約束ことごとくこゝに成立して、後の文學は皆之に則るに至れり。

初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に、久しく

宿らで、ほどへて後にいたりければ、かの家のあ
るじ、かくさだかになんやどりはある。といひい
だして侍りければ、そこに立てりける梅の花を
をりてよめる

紀 貫 之

人はいさ心も知らず、ふるさとは

花ぞ昔の香ににほひける。

櫻花の散るをよめる 紀 友 則

ひさかたの光のどけき春の日に、

しづ心なく花の散るらん。

蓮の露を見てよめる 僧 正 遍 昭

はちすばの濁りにしまぬ心もて、

何かは露を玉とあざむく。

題知らず 讀 人 不 知

白雲にはねうちかはしとぶかりの

かずさへ見ゆる秋の夜の月。

内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十の賀しけ
る時に四季の繪かけるうしろの屏風に書きた

りける歌 凡 河 内 躬 恆

すみのえの松を秋風吹くからに、

聲うちそふる沖つしらなみ。

寛平の御時后宮の歌合の歌 壬 生 忠 岑
みよしの、山の白雪ふみわけて

紀友則

貫之の姪。
生歿の年未
詳。

僧正遍昭

(一〇七、一五〇)

内侍のかみ

尙侍藤原滿
子。

右大將

右大臣右近衛
大將藤原定
國。滿子の兄。

壬生忠岑

(一五八、一六五)

惟喬のみこ
(四八二五三)

入りにし人の音づれもせぬ。

惟喬のみこの狩しける供にまかりて、宿りに歸りて、夜一夜酒を飲み、物語をしけるに、十一日の月も隠れなんとしけるをりに、みこ酔ひて内へ入りなんとしければ、よみ侍りける

在原業平
(四八二五三)

在原業平朝臣

あかなくにまだきも月のかくるゝか、

山のはにげて、入れずもあらなん。

(古今和歌集)

第二日 記

貫之は和歌に於て久しく後世の模楷たりしのみな

らず、國文を以て始めて和歌序を作り、勅撰集序を記し、又日記をものし、以て國文をして漢文と並行する地位に立たしむるに至れり。是、貫之の國文學に於ける殊功といふべし。就中土佐日記は、土佐守の任果て、京に歸りし海路の日記にして、自ら婦人に託して之を記せり、その文體簡朴にして輕妙、往々諧謔を交ふ。日記の巨擘と稱せらる。

大湊より

紀 貫 之

八日
承平五年正月。
同じ處
土佐國大湊。

八日、さはる事ありて、なほ同じ處なり。今宵の月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の「山のは逃げて入れずも

あらなんといふ歌なんおぼゆる。もし海邊にて詠ま、
しかば、波立ちさへて入れずもあらなんと詠みてましや。
今この歌を思ひ出でて、ある人の詠めりける、

照る月の流るゝ見れば、天の川

出づるみなとは海にざりける。

とや。

九日、つとめて大湊より那波の泊を追はんとて漕ぎ出で
けり。これかれ互に「國の境の内は」とて見送に来る人數
多が中に、藤原言實・橘季衡・長谷部行政等なん御館より出
で給ひし日よりこゝかしこに追ひ來る。この人々ぞ志
ある人なりける。この人々の深き志はこの海にも劣ら

那波
土佐國安藝郡
奈半利のあた
りといふ。

ざるべし。これより今は漕ぎ離れてゆく。これを見送
らんとてぞ此の人どもは追ひ來ける。かくて漕ぎ行く
まにまに、海のほとりに止る人も遠くなりぬ、船の人も見
えずなりぬ。岸にもいふ事あるべし、船にも思ふ事あれ
ど、かひなし。かゝれば、この歌を獨言にしてやみぬ。
思ひやる心は海をわたれども、

ふみしなければ、知らずやあるらん。

(土佐日記)

遅塚麗水

名は金太郎
文章家。
(三五九)

一一 不二の神山

遅塚麗水

函嶺より望めば、不二の神山は晴巒雨峯を壓して、高

く雲漢を抜く。上峰は五朶を成せり。上、青天と連り、下、白雲と接す。車の行くに隨ひて、四朶となり、三朶となり、既にしてまた四朶となる。雪は日を得て雲母の色をなし、陰は紫嵐を凝せり。御殿場に到りて客舎に就く。日、亭午に近し。主人曰く、「登嶽の客はみな平旦にこの處を發す。貴客は京人なれば、攀躋の具に乏しからん。合力を齎ひ給へ」と。合力とは綿衣草鞋、食糧を負うて東道をなすものなり。余應ぜず。直に飯を命ず。飯終る。馬を喚ぶ。馬來る。まづ草鞋數隻を買ひ來らしめ、これを腰間に帶

びて、騎して發す。仰ぎ見れば、岳影忽ち亡く、風色甚だ悪し。馬夫、面を仰いで曰く、「雨將に來らんとす。然れども山は應に牢晴なるべし」と。雲の徂徠すること頻なり。中に隱々として岳影のさながら斷霞の如く紅なるを見る。一路、燕麥香し。馬鈴の音を趁うて胡蝶亂れ飛び、夢の神をそのやさしき翅に載せて我が懷に送る。既にして大いに嘶く聲あり。夢覺むれば、急坂馬頭より起る。馬夫曰く、「回馬坂なり」と。馬を舍つ。賣茶の翁に乞うて茶を喫し、憩ふこと少時。これより路

は透迤として矮樹長草の間を通ず。路窮りて、一字あり。金剛杖を賣る。これを購ふ。長さ五尺にして、六稜角をなす。既に登れば、草や樹や漸く短く、漸く少なし。初には人を没し、次には帽に及び、次には肩に至り、而して袖而して行膝、歩に従ひて漸次に短小となる。遙に望めば草色煙のごとく、迢々として雲に入る。近づけば却て無し。唯蓬の花の處々に散點せるを見るのみ。遂に一合目に至る。路は爛沙の上を走る。顧みれば近山遙水、歴々見るべし。身は既に人間を抜

くこと幾百尺の上にある。鞋を没する沙は淨うして纖埃なし。踏みて行けば、珊々として聲あり。已に二合目に至り、更に三合目に至る。石室あり。茶を賣り、菓子を賣り、又卵と鞋とを賣る。凡そ一合毎に石室あり。皆山骨の露出せる處を相し、之を背にして屋を作り、圍むに累石を以てし、僅に一面を缺きて出入する處とす。遠く望めば、隆然として凸起せり。室に入れば方三四弓、直に地上に板を列ね、上に席を布くのみ。光景頗る幽陰なり。已にして四合目に至れば、足柄愛鷹及び甲州の諸山

は皆余が鞋底にあり。大地の蒼々然たる處に兩碧の甚だ明かなるを見る。南なるは富士の沼にして、東なるは甲州山中の湖なり。小なること盆池の如し。膚寸の雲の帯び得たる雨を受くとも、水は當に四坡に横溢すべきかと疑はる。眦を決すれば、東海の濱、一帶百里、水は南溟の雲に入る。その雲を斷ちて、一道の霓よりも淡きもの走る。これ紫瀾の岸を打つて回る影なり。時は暮に近し。雲あり相逐うて上峰より落ち來り、皆下界に堆屯して流れず。風の吹き披くあれば、青絲を穿ちたる銀針ありてこれ

を縫ふ。その青絲に似たるものは是田子の浦に浮べる三保の松原か。何ぞそれ纖々として縷の如き。その銀針に似たるものはこれ富士川か。三十六瀬、何ぞそれ一芥を浮ぶるに勝へざる。既にして、山影皆消ゆ。雲既に人寰を鎖せり。岳上の奇は將にこれより始らんとす。

忽ち脚下に波濤の如き聲を作すあり。一望平布の雲は争ひ立ちて羊角して嶽に登る。これ風雨の人間に満つなり。雲急に余を追ふ。余乃ち遙方の石室を望みて走る。雨は逆上して、濺ぐこと亂雹の如

羊角
城ニ於搖、羊角
而上者九萬
里。

し。草帽飛ばんとすること數次。身は雲と相先後す。漠々たるもの既に行際を没せり。超乗して走りて、纔に石室に到れば、雲は既に咫尺にあり。余を石室のうちに窮追して、更に上峰に向つて走る。走る處石沙皆活く。石室の人晒つて迎へて曰く、これ過雨なり。頃刻にして霽れなんと。言未だ終らざるに、黒風、白雨室に滿つ。膝を抱きて俟つこと少時にして、石室の戸に微紅あり。走り出でて、さきに余を追ひし雲を望めば、既に上頭の寶永山に觸れて碎け、更に夕暉に照されて、雨は千顆、萬顆の珠璣となり、

紛々として中天より落つ。手を舉げてこれを受くれば、光彩一瞬にして消え、たゞ新に亂暈の痕を衣上に添ふるのみ。顧みて人寰を見れば、正に是黄昏なり。夕暉の前に雲あり。奇峰を成して争ひ起つ。みな日を銜めるがために紅く輝き、周圍に金精の色を放てり。既にして、朱丸の如き夕暉急下すれば、奇峰忽ち没し、天地寥廓、皎然たる大月虚明に浮ぶ。指を屈すれば、今宵はこれ陰曆六月十一日なり。余、金剛杖を横たへて、看ること少時にして殆ど我あるを忘る。仰いで上峰を望めば、雲あり。俯して下界

を瞰れば、雲あり。上下の雲間に、唯鐵よりも黒き一大絶壁の斜に懸垂するあるのみ。四顧すれば、縹緲蒼茫、身は天柱を攀ぢて紫微に入る想あり。この高遠の景に對しては口言ふ能はず、筆描く能はず。神澄み、氣清く、愴然として涙の隕つるを知らず。爛沙の上を度れる一路の微白なるを踏み、磬打して登り、終に行きて六合目の石室を得たり。石室の主人爐を擁して坐す。驚き起ちて迎へて曰く、「暮夜獨往すること貴客の如きは稀なり」と。余寒きこと甚だしきを以て、直に主人の座を奪うて坐し、且飯を命

ず。粗糲にして食ふべからず。枯魚一枚、豆腐汁一椀、また箸を下すに堪へず。この地、海を抜くこと七千尺。氣壓の微弱なるが爲に、飯を炊げども之を熟せしむること能はず。糲を加へて纔に粘力を添ふといふ。饑ゑんことを恐れて、勉強して數椀を傾け、終に衾を擁して臥す。枕邊に鏘然たるものあり。琴筑を鳴らすが如し。これ屋上の雪の解けて筧を傳ふ聲なり。久しうして眠り得ず。首を上ぐれば、小燈焰なく、石室の中、凄陰幽寂、屋外たゞ風聲を聞くのみ。

未だ曉ならざるに、短夢回り來れば、主人は既に爐に踞し、飯を炊ぐ。余既に萬古の雪に嗽ぎて、心下に一塵なし。靜坐して日出を待つ。既にして主人塵きて曰く、「日將に出でんとす」と。起ちて扉邊の平石に踞してこれを見る。初、東方昏黒の裏、紫氣ありて搖曳し、漸く變じて微紅となる。余、眸を凝す。俄にして、炬の如きものあり、渥丹のごとし。或は昇り、或は降る。會、彷彿として上峰に天雞の聲を聞く。石室の人曰く、「これ淺間神社の鐸聲なり」と。余、屏息して立ち、石室の人跪きて拜す。須臾にして、渾沌のどこ

ろ依稀として五彩の龍文をなし、次第に鮮明を加へて、光芒陸離、遂に混じて猩血の色をなす。中に物ありて浮べり。卵子の如し。忽ち合して鎔銅の色をなす。石室の人曰く、「これ太陽なり」と。鎔銅の色は再び變じて爛銀の色をなし、環らすに紫金を以てし、終に白熾鐵の色をなす。忽ち鐵椎の一下に逢ふが如く、百千道の金箭天を射、猩血の色溟中に逆だち、太陽之を追うて躍如として昇る。天地こゝに清明なり。余この宇宙の大觀を見るを得て、胸宇の海の如く濶

きを覺ゆ。石室の人と共に食し、連りに數椀を傾け、
 結束して出づ。石室の人曰く、「これより峻なること
 甚だし。徐々として脚を攢めて登れ。然らずんば、
 呼吸切迫して、上峰に達する能はざらん」と。謝して
 行く。仰ぎ見れば、崢嶸たる絶頂は四峰を成して高
 く天を衝き、無心の雲もまた怖れて近づき飛ばず。
 下瞰すれば、絶壁斜に走りて直に人寰に至り、一物の
 遮るあるなし。爛沙漸く大に、處々に山骨を露す。
 その處、常に雪あり。鞋痕、碎銀の上に狼藉たり。掬
 してこれを食はんとし、驚歩して淨處に就く。萬古

の雪、冷にして、脾肝に透徹す。路益急なり。盤折し
 て登り、纔に八合目の石室に至る。これより、路愈峻
 なり。鞋底幾たびか摩敝して、終に襪に及ぶ。踞し
 て鞋を易ふること兩三次。岳神の棲處は既に近し。
 奇巖處々に立つ。その狀、巨魔の如し。既にして九
 合目に到り、遂に絶頂に達す。(日本名勝記)

一二羽衣

風早の三保の浦わを漕ぐ舟の浦人騒ぐ浪路かな。
 白龍 是は三保の松原に白龍と申す漁夫にて候。

羽衣
 シテ 天人
 ワキ 漁夫白
 ツレ 漁夫
 風早の
 風早の三保の
 浦わを漕ぐ舟の
 浦人騒ぐ、
 舟人さわぐ、
 波立つらし

風向ふ
風むかふ雲の
浮波立つと見
て、釣りせぬ
先にかへる舟
人。

萬里の高山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨始めて
霽れたり。げにのどかなる時しもや、春のけしき松
原の浪立ちつゞく朝霞。月も残りの天の原及びな
き身の眺にも心空なる景色かな。忘れめや、山路を
分けてきよみ瀉、遙に三保の松原に立ちつれ、いざや
通はん。風向ふ雲のうき浪立つと見て釣せて人や
歸るらん。待てしばし、春ならば吹くものどけき朝
風の松は常磐の聲ぞかし。浪は音をき朝なぎに釣
人おほき小舟かな。

に、虚空に花降り、音楽聞え、靈香四方に薫ず。是、唯
事と思はぬ處に、これなる松に美しき衣懸れり。
寄りて見れば、色香妙にして常の衣にあらず。如
何様取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさば
やと存じ候。

天人のう、其の衣は此方にて候。何しに召され候
ぞ。

白是は拾ひたる衣にて候程に、取りて歸り候よ。
天其は天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきも
のにあらず。もとのごとくに置き給へ。

白そも、此の衣の御主とは、さては天人にてまします
 かや。さもあらば末世の奇特に留めおき、國の寶
 となすべきなり。衣を返すことあるまじ。
 天悲しやな。羽衣なくては飛行の道もたえ、天上に
 歸らんことも叶ふまじ。さりとは返したび給
 へ。

此の御詞を聞くよりも、愈、白龍力を得、固より此の身
 は心なきあまの羽衣取隠し、かなふまじ。とて立ちの
 けば、今はさながら天人も羽なき鳥の如くにて、あが
 らんとすれば衣なし、地に又住めば下界なり。とや

あらん、かくやあらんと悲しめど、白龍衣を返さねば



五衰
 衣。埃塵。花
 葛萎悴。兩腋
 汗出。臭氣入
 身。不樂本
 座。

さましや。天の原ふりさけ見れば霞たつ雲路まど
 ひてゆくへ知らずも。住み馴れし空にいつしか行

く雲の羨ましき景色かな。迦陵頻伽の馴れくし
聲、今更にわづかなる雁がねの歸り行く天路を聞け
ばなつかしや。千鳥鷗の沖つ浪、往くか、還るか。春
風の空に吹くまでなつかしや。

白いかに申し候。御姿を見奉れば、餘りに御痛はし
く候程に、衣を返し申さうずるにて候。

天あら嬉しや。此方へ賜はり候へ。

白暫く。承り及びたる天人の舞樂、只今こゝにて奏
し給はゞ、衣を返し申すべし。

天うれしや。さては天上に歸らんことを得たり。

この喜に、とてもさらば、人間の御遊の形見の舞、月
宮を廻らす舞曲あり。只今こゝにて奏しつゝ、世
のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくては叶
ふまじ。さりとしては、まづ返し給へ。

白いや、此の衣を返しなば、舞曲をなさで、そのまゝに
天にやあがり給ふべき。

天いや、疑は人間にあり。天に偽なきものを。

白あらはづかしや。さらば。

とて羽衣を返し與ふれば、少女は衣を着しつゝ、霓裳
羽衣の曲をなし、天の羽衣風に和し、雨に濕ふ花の袖、

春霞
春霞たなびきにけり、久方の月の桂の花や咲くらん。

一曲をかなで舞ふとかや。東遊の駿河舞、此の時や始めなるらん。それ久堅のあめといつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限もなればとて、ひさかたのそらとは名づけたり。然るに月宮殿の有様、玉斧の修理とこしなへにして、白衣、黒衣の天人の數を三五に分つて一月夜々のあまをとめ、奉仕を定め、役をなす。我も數ある天少女、月の桂の身をわけて、假に東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。春霞たなびきにけり、ひさかたの月のかつらの花や咲く。げに花か

天つ風
天つ風雲の通路ふきとぢよ、少女の姿しばしとどめん。

君が代
君が代は天の羽衣まれにきて、なづともつきぬいはほなるらん。

づら、色めくは春のしるしかや。面白や、天ならでここも妙なり。天つ風、雲の通路吹きとぢよ。少女の姿しばしとどまりて、此の松原の春の色をみほがさき。月きよみがた、富士の雪、いづれや春の曙。たぐひなみも松風ものどかなる浦の有様。其の上、天地は何を隔てん、玉垣の内外の神のみすゑにて、月も曇らぬ日の本や。君が代はあまの羽衣まれにきて、撫づとも盡きぬいはほぞと聞くも妙なり、東歌。聲をへてかづくの笙、笛、琴、篳篥、孤雲の外にみちくして、落日の紅はそめいろの山をうつして、緑は波にうき

鳥がはらふ嵐に花ふりて、實に雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる。南無歸命月天子、本地大勢至。東遊の舞の曲。あるひは天つみそらの緑の衣、又は春たつ霞の衣。色香もたへなり少女のもすそ。左右左さいう颯々の花をかざしのあまの羽袖。なびくもかへすも舞の袖。東遊のかずくに、其の名も月の宮人は、三五夜中のそらに又満願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さるほどに、時移つて天の羽衣浦風にたなびきたな

びく三保の松原うき鳥が雲のあしたか山や富士の高嶺、かすかになりて、天つ御空の霞にまぎれて失せにけり。(觀世流謠曲)

一三 平安朝の文學 その二

第三 物語

源氏物語五十四帖は紫式部の著す所なり。前篇は光源氏を主人公としてその得意の狀を寫し、後篇の宇治十帖は薰大將を主人公として、その失意の樣を敘す。全篇の脚色整然として紊れず、主人公を圍繞

せる各種の人物の性格も明瞭に發揮せられ、局面の變化も亦頗る多し。蓋し源氏の大作たる所以は、人物の描寫が活躍せると共に、自然を描ける文辭の絢爛精妙なる點にあり。人事の描寫の後には必ず自然の背景を添ふ。人事と自然とを融合せる詩的思、想は是に至りて最大の發達をなせるなり。その半面は和歌の趣味にして、地の文には必ず歌の景情を含めり。若し夫、散文としての外形より見んか、純國語として最も發達せる種々の形式を發見し得べし。故に古今集が和歌の模範文學たるが如く、源氏物語

は國文として後世の模範文學となれり。源氏の用語は恐らくは當時の上流社會・貴婦人の通用語なりしなるべし。母音多く、敬語に富める國語の一層進歩せるものにして、にをが等の接續的助辭を以ていくつとなくその句を連接しゆき、一文にして一頁に互るもの亦稀有に非ず。嫻々として風に靡く野萩の花の如く、柔軟艷麗正にその内容に恰當せり。

桐 壺

紫 式 部

さきの世にも御契や深かりけむ、よになく清らなる玉のをのこみこさへ生れ給ひぬ。いつしかと心もとながら

せ給ひて、急ぎ參らせて御覽するに、珍らかなる乳兒の御容なり。一の皇子は右大臣の女御の御腹にて、よせ重く、疑なき儲の君と世にもてかしづき聞ゆれど、この御匂には並びたまふべくもあらざりければ、大方のやんごとなき御思にて、この君をば私のものにおもほしかしづきたまふこと限なし。

この皇子三つになりたまふ年、御袴着の事、一の宮の奉りしに劣らず。内藏寮納殿の物を盡して、いみじうせさせたまふ。それにつけても、世の誹のみ多かれど、この皇子のおよづけもておはする御容、心ばへ、有りがたく珍らしきまで見えたまふを、えそねみあへたまはず。物の心知

りたまふ人は、かゝる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かしたまふ。

その年の夏、御息所はかなき心ちに煩ひて罷でなんとしたまふを、暇更に許させたまはず。年ごろ常のあつしさになりたまへれば、御目馴れて、猶暫し試みよ。とのたまはするに、日々に重りたまひて、只五六日の程にいと弱うなれば、母君泣くく、奏して罷でさせ奉りたまふ。

(源氏物語)

第四 草子

源氏物語と相並びて國文の雙璧と稱へらるゝものは清少納言の枕草子なり。枕草子の妙はその隨筆

たる點にあり。忽ちにして人事、忽ちにして自然、或は公事を評し、或は人物を評し、或は自らを誇り、或は皇后を褒め、閱讀の間多種の事件に遭遇して殆ど應接に遑あらざるなり。その變化、その錯綜、こゝに始めて全篇の妙味を成し來る。文章の妙所も亦句法の錯綜にあり。或は長句、或は短句、忽ちにして花をいひ、忽ちにして小兒にうつり、又草花を點じ來り、再び人事に入り、忽ちにして今、忽ちにして昔、時と場所とを右往左往し、天地間の萬物、人事と自然とを問はず種々雜多に、想像の到るかぎり捕捉し來る。その

變化轉換の妙即ち人を魅するに足るなり。枕詞・掛詞の妙味は元來人をして一事を思念せしめて直に他の事物に轉ぜしむるにあり。枕草子の文は即ちその手段の最も發達せるものなり。或事柄に執着固定せずして一時に多方の興味を惹き起す妙機をとらへ得たる所以は、即ちその文の輕妙洒脫の氣を帶ぶる所以なり。

美しきもの

清少納言

瓜うりに書きたるちごの顔。雀の子のねずなきするに躍りくる。また紅などつけて据ゑたれば、親雀の蟲など持て

來てくゝむるもいとらうたし。

三つばかりなるちごの、急ぎて這ひ來る道に、いと小さき塵などのありけるを、めざとに見つけて、いとをかしげなるおよびに捉へて、大人などに見せたるいと美し。あまにそぎたるちごの目に、髪のおほひたるを、かきはやらで打傾きて物など見るいと美し。襪がけにゆひたる腰のかみの、白うをかしげなるも見るに美し。大きにはあらぬ殿上童の、さうぞきたてられてありくも美し。をかしげなるちごの、あからさまに抱きてうつくしむほどに、かいつきて寢入りたるもらうたし。

雛の調度。蓮の浮葉のいと小さきを、池より取り上げて見る。葵の小さきもいと美し。何もくゝ、小さきものは美し。

いみじう肥えたるちごの二つばかりなるが、白う美しきが、二藍のうすものなど、きぬ長くてたすきあげたるが、這ひ出でくるもいと美し。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲をさなげにて文讀みたるいと美し。

雛の雛の足だかに、白うをかしげに、衣みじかなるさまして、ひよくゝとかしがましく鳴きて、人のしりに立ちてありくも、又親のもとにつれだちありく見るも美し。鴨の卵。舍利の壺。撫子の花。(枕草子)

第五 歴史

榮華物語は全篇四十帖、要は關白道長が一生の榮華を寫せるものなり。この書一名世繼物語と稱せしは歴史物語といふにひとし。歴史と稱すといへども宮廷の歴史なり、後宮の歴史なり。この點に於ては、假構物語といくばくも異ならず。物語の名も亦ふさはしといふべし。文學上の價值より見れば、大鏡は遙に榮華の上にある。大鏡は歴史として列傳體を取れり。而して藤氏の榮華を寫すは全く榮華に等し。その文や勁健にして筆端褒貶の意を含めるは、疑ふらくは男子の作なるべし。この二者は藤

原氏時代の最後の文學として藤原氏時代の最後の榮華を寫せるものなり。平安朝の世は平安の都の今を盛と榮えたる時にして、上流の紳士は詩歌に、音樂に、舞蹈に、風流閑雅の技を弄べり。その束帶の裾を曳きて頻繁なる年中行事に仕ふるは如何に優美なりけん。それらの面影は各種物語の上に想見すべきなり。

菅原大臣

醍醐のみかどの御時、時平のおとゞ左大臣の位にて、年いと若くておはします。菅原のおとゞは右大臣の位にお

はします。その折みかど御年いと若くおはします。左大臣に世の政行ふべき宣旨下させ給へりしに、その折左大臣御年二十八九ばかりなり、右大臣の御年五十七八ばかりにやおはしましけん、共に世の政をせしめ給ひし程に、右大臣はざえ世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきてもことの外にかしこくおはします。左大臣は御歳も若く、才もことの外に劣り給へるによりて、右大臣御覺えことの外におはしましたるに、左大臣安からず思したるほどに、さるべきにやおはしけん、右大臣の御爲によからぬこと出で来て、昌泰四年正月二十五日太宰權帥になし奉りて流され給ふ。

御前の梅の枝を御覽じて、

東風吹かば、にほひおこせよ、梅の花、

あるじなしとて春をわすれそ。

又亭子の帝にきこえさせ給ふ、

流れゆくわれは水屑になりはてぬ、

君しがらみとなりてとゞめよ。

なき事によりかく罪せられ給ふをからく思し嘆きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆくくと

隠るゝまでもかへりみしはや。

山崎
山城國乙訓郡
山崎町。
京都の南三
里。

亭子の帝
宇多法皇。
亭子院はもと
京都七條にあ
りき。

また播磨の國におはしましつきて、明石の驛といふ處に御宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて作らせ給へる詩いと哀し。

驛長無驚時變改、一榮一落是春秋。(天鏡)

之を要するに、平安時代は前後四百年に互り、古代文化の最も光彩ありし時代にして、江戸時代と共に我が國に於ける文學隆盛の二大時期とす。されど當時の文化は上流の社會に限られて一般の社會に及ばず、事物の發達すべて貴族的傾向を帶び、第宅衣服等實用を忘れて粉飾に過ぎ、輕快を重んぜずして綺

麗を喜ぶ。従つて文學も物語は深窓消閑の玩具、和歌は貴族交際の媒介として帝都上流の間に行はるのみ。下流の情態を寫したる作品は殆ど世に出でざりき。(國文學歴代選に據る)

一四 朗詠五則

早春

都 良 香

氣霽レテハ、風、新柳ノ髮ヲ梳リ、
氷消エテハ、浪、舊苔ノ鬚ヲ洗フ。

水 花

菅 原文 時

都良香
平安時代の儒者。
(二五〇四—二五〇五)

菅原文時
平安時代の儒者。
(二五〇八—二五〇九)

誰カ謂ヒシ、「水、心ナシ」ト。濃艶臨ンデ波、色ヲ變ズ。
誰カ謂ヒシ、「花語ハズ」ト。輕漾激シテ影、唇ヲ動カ
ス。

前中書王

中務卿兼明親
王。
(一五四—一六四七)

前中書王

扶桑豈影ナカラシヤ。浮雲掩ウテ忽チ昏シ。
叢蘭豈芳シカラザランヤ。秋風吹イテ先敗ル。

白樂天

唐の詩人。
(一四三—一五七)

白樂天

遺文三十軸、軸々金玉ノ聲、
龍門原上ノ土、骨ヲ埋メドモ名ヲ埋マズ。
將軍 陸將軍

三尺ノ劍ノ光、氷、手ニ在リ、
一張ノ弓ノ勢、月、心ニ當ル。
〔原漢文和漢朗詠集〕

寺門政次郎

水戸の人。
(一四九—一五八)

藤田東湖

一五年 寺門政次郎に答ふ
一兩年以來十數度之貴翰、尙又時々預御惠投物
殊に當春梅花之御贈物等、實以御厚意不淺。僕
が頑鈍狂愚、何故右様御眷顧被下候哉、不知所謝
汗顔之至に御座候。

諸慎中は貴答延引も當然に候處、當二月幽厄を
脱し候上は、早速一書を裁し、右數度の御厚意を

慎中

弘化四年十月
より嘉永五年
二月まで水戸
に謹慎を命ぜ
らる。

謝し候筈之處、爾來僕が境界、實以寸暇も無之、尤日々夕刻太白を傾け候暇は有之候へども、其外は兎角閑隙を得ず、今日始めて及貴答候。

一、先年、弘道館にて貴兄御面貌は確に相覺え候。所謂嶄然頭角、今以心目に宛然に御座候處、追々御詩文等拜見、尙又御尊承知致候へば、近來益御研精の由、憚ながら感心仕候。老人臭き申分には候へども、御國も學校御開以來、讀書家は悉く澤山に相成候へども、眞實の學者は寥々に御座候間爲國家御勵精御尤に存候。僕などは罪名

弘道館
水戸藩の學校、天保十二年徳川齊昭これを開く。

放翁
宋の陸游、放翁と號す。(一七六一七七)。

弘道館記
徳川齊昭の撰、日書せるもの。



藤田東湖

難默且は度々之御細書、御深意をも推察致、旁心事略吐露仕候。

ども、學問は實學に無之ては、却て無學にも劣り申候。弘道館記中に「忠孝無二、文武不岐、學問事

業、不殊其效。」と被遊候儀、實に學者立志之模範、志士報國之根本に御座候はんか。今世、親孝行の様なれども、御奉公は出來ぬ風之人も相見え、又御奉公出來候様にても、父子之中とくと不致向も相見え候。此等決して聖人の道に非ずと存候。又少々書を讀み候へば、何か仔細らしき顔色を致、言語等漢文交りにしてしやらくさく候へども、劍槍等之藝一切出來不申、文弱白面之書生と相成候儀、毛唐人ならば其にて宜しきかも不相知候へども、假初にも神州尙武之域に生れ、

且は武家之飯を食ひ候者は、右様白面之書生は風上へも置兼候事勿論に御座候。武人之愚にも困り候へども、どちらと申候へば、寧ろ文弱の書生には勝り可申歟。併可成丈は、文武不岐兼備有之度事、是又勿論に御座候。

學問、事業其效を殊にせざるに至り候ては、中々難物也。僕が輩、頰白に相成候へども、今以學問、事業一致之場合に相成不申、乍不及心を用ひ候へども、修己治人の工夫、明倫正名之講究、時々刻刻離れ不申候は、貴兄などは妙齡の御事故、必

十七史

史記。漢書。後漢書。三國志。晉書。宋書。南齊書。梁書。陳書。魏書。北齊書。周書。隋書。南史。北史。唐書。五代史。二十一史。十七史に、宋史。遼史。金史。元史。を加ふ。

ず學問事業之一致も御出來被成候はん、隨分御研精御尤に御座候。

一、讀書は博きを貴び候へども、うはすべり致候ては、何萬卷を讀み候とても、用を成し兼候はんか。古人の所謂「眼光紙背に透る」と申す如く讀み度事に御座候。次第々々に後之世に生れ候程讀書多く相成申候。古人は六史か七史讀み候へば相濟み候が、十七史又は二十一史と申す様に相成、末が末に相成候は、三十史も五十史も讀不申候ては不相成譯合故、博きを貴び候中

にも、その要を得候儀肝要と存候。人之持前種種有之候故、一概には申兼候へども、歴史等も唯ばつと讀み候よりは何か一つ講究著述致す心得にて讀み候方、格別に益を得候様相覺申候。制度之事も兵機之事も文辭之事も名君賢相の行狀其の外一々記憶可致と存候ては、大抵之人にては中々覺え兼申候。東坡が漢書を讀み候法など面白く御座候。尙又御勘考御尤に存候。一、文章は末藝に候へども、自分にて文を書き候位に無之候ては、經書も歴史も本當に解し不被

東坡が漢書某讀漢書、至レ是凡三經、手鈔之矣。初則一段事鈔三、字一爲題、次則兩字、今則一字。

英雄人を欺

七言古詩、惟子美不レ失ニ初唐氣格、而縱橫有之。太白縱橫、往々惡奪之末間雜ニ長語。英雄欺レ人耳。

東夷の人

贊ニ孔子真ニ「日本國夷人物茂脚拜手稽首敬題。」

申候間、隨分御餘力には御修行御尤に存候。但近來、長短句にてごまかし候詩流行致候處、唐詩選之序にも、李太白長語を用ひ候事を評して、「英雄人を欺くのみ」と申候。今之流行は凡庸人を欺くとも申すべく候。右之類は先々御稽古無之方と存候。

一、慶元以來、人物如林、豪傑も追々に出で候處、其中にて、仁齋之學問、徂徠之文章、熊澤之經濟、新井之敏捷など、皆可畏存候。併右之内、徂徠は更に名分を存ぜず、自ら東夷之人と稱し候儀、不届至

鶴岡表、藤田東湖筆、新井也、才氣絶倫に候へども、東都を張立て候志は惡むべく候。さ候へば、今に在つては、右數子の長を取り、短を捨て、實學講究致

藤田東湖筆蹟(維新志士遺芳帖)

司馬溫公

北宋の司馬光、字は君實、諡して溫公といふ。

(一七九—一七四六)

朱文公

南宋の朱熹、字は元晦、諡して文公といふ。

(一一一〇—一一八〇)

韓魏公

北宋の韓琦、字は稚圭、魏國公に封ぜらる。

(一〇六八—一〇四五)

し、孔子の遺意に叶ひ候様、御同意希望致度事に御座候。今世の儒者、動もすれば唐人の事は丁寧に申し、司馬溫公、朱文公、韓魏公などと稱へ、さて「新田義貞が云々、楠木正成が云々」など申候類甚だ不相濟。右様の人をば、僕は毎々和唐人と唱へ申候。御一笑可被下候。其外、當世の學風其弊不少候へども、逆も書中に盡し兼候故、先其一端を挙げ候而已に御座候。僕は最早貴地などへ出て候事は、終身無之候間、拜面も六ヶ敷候處、貴兄は御墓參、御對面等にて

御歸郷も御自由故、若し來春など一寸も御歸郷に相成候はゞ、種々存候丈の事は御切磋商可申候。先は今日は前文御申譯旁、一書を裁し候事に御座候。乍併御覽之通、亂筆嚙御讀兼被成候半と閣筆候。以上

穂積八束

法學博士。東京帝國大學法科大學教授。

(一八五〇—一九三二)

一六 國體の精華

穂積八束

我が日本の國體と國民道德との基礎は祖先教に淵源す。祖先教とは祖先崇拜の大義を謂ふ。我が日本民族の固有の體制は血統團體たり。血統團體と

は、民族が其の同始祖を敬愛するに由りて共存團體を成し、祖先の威力に服従するに由りて平和の秩序を維持するを謂ふ。小にしては家を成し、大にしては國を成すものなり。

祖先崇拜の大義は血統團體を構成し維持する原由たると同時に、血統團體の存續は亦祖先崇拜の大義を鞏固にし、深遠にする成果あり。二者相待ちて消長し、須臾も離るべからず。而して、我が固有の國民道德たる忠孝、友和、信愛の道は、一に皆祖先崇拜の大義に原由し、血統團體を保維する軌轍たり。我が堅

固なる國家の體制は祖先教の基礎の上に立つ。これを千古に維ぎ萬世に傳ふるは、我が民族の特質にして、我が國體の精華たる所なり。

人は獨立孤存し得べき者にあらず、共同團結して、以て其の生存を全うす。而して其の團結する原由と形體とは固より一ならず。但し利害を以て集散し、約束を以て協和を維持する者は、其の團結固からず、又久しからず。利害の異同は情況に隨ひて時に變轉し、人爲の約束はまた人爲を以て解除せらるゝを免れざればなり。血族相依るは自然の團結なり。

兒孫が父母の保護の下に團欒するは社會の始にして、民族が同始祖の威靈の下に國を成すは天賦の團結たり。血脈相通ずるは天然の連鎖なり、人爲を以つてこれを絶つことを得ず。利害の觀念の外に超越し、敬愛の至情に由りて離るべからざる共同生存を成す者は血統團體なり。血統は之を祖先に受け、之を子孫に傳ふ。故に其の團結は永久なり。血統關係は利害を以て離合斷續するを得ず。故に其の團結は鞏固なり。而して之を統一する者は祖先の威力なり。故に子孫がその

祖先に對するや、敬愛の情厚く、忠順の念深し。家に在りては、家長は祖先の威靈を代表し、家族に對して家長權を行ひ、國にありては、天皇は天祖の威靈を代表し、國民に對して統治權を行ふ。家長權と統治權とは共に君父が其の祖先の慈愛する子孫を祖先の威靈に代りて保護する權力なり。吾人の今日あるは、吾人の祖先が血統團體を建設し、維持し、遺傳したる餘惠なり。何が故に血統相近き者が相依りて家を成し、氏族を成し、又國を成したるか。祖先を崇拜し、其の威力と慈愛との下に生存の

保護を全うせんと欲する天性の至情に外ならざるなり。汝の父母を敬愛し、其の慈愛なる保護の權力に従順なる至情は、延いて之を其の父母の父母に及すべし。吾人の祖先の祖先は即ち畏くも我が天祖なり。天祖は國民の始祖にして、皇室は國民の宗家たり。父母拜すべし、況や一家の祖先をや。一家の祖先拜すべし、況や一國の始祖をや。家長の位は祖先の靈位にして、皇位は天祖の靈位なり。父母は現世に在る祖先たり、天皇は現世にある天祖たり。父母に孝なるべき所由は、即ち皇室に忠なるべき所由

にして、之を一貫する國教は祖先の崇拜なり。此の大義は吾人の祖先が國家を成したる基礎にして、吾人が之を永遠に維持する軌道たるものなり。人は信仰に因りて動作す。限定せられたる人智は、宇宙の現象を総合して之を其の根柢の眞理に歸結し、絶對の理法を自覺して行動すること能はざればなり。吾人の祖先は、肉體の外に不死の靈魂あることを確信し、又子孫を慈愛する父母の威靈は、顯界に於て其の肉體を喪ふとも、尙幽界に在りて其の子孫を保護することを確信したり。是、祖先崇拜の大義

の淵源にして、敬神の我が國教たる所由なり。我が固有の國體・民俗、祖先の祭祀を重んずるより重きはなし。家は祖先の威靈の住む所、國は天祖の威靈の住む所にして、祖先の威靈は家國を防護す。吾人は祖先の生命の繼續にして、子孫は吾人の生命の延長たり。祖先の祭祀を不朽に絶たざるは、吾人の肉體に於て代表せらるゝ祖先の生存を永遠に傳へんと欲するなり。祖先と吾人と子孫とが、家國の觀念に於て同化し、其の繁榮にして永久なる存在を全うする大義此に存す。祖先の靈位を現世に代表する君

父に忠孝なるは、祖先に忠孝なるなり。君父が臣子を愛護するは、祖先が其の子孫を愛護するなり。夫婦の和、兄弟の友、民族の共愛、悉く皆我が同祖の祭祀を重んじ、之を永遠に傳へ、祖先の家國の鞏固にして永久なることを欲する祖先の遺志に適從する道ならざるはなし。我が祖先崇拜の大義は國民の確信に出で、不朽の國體は是に由りて其の基礎を立て、國民の道德は是に由りて深厚なり。斯の國斯の民を、千古に溯り萬世に互りて保持する者は、此の國體の精華たる我が固有の祖先教の力なり。(愛國心)

